



The Circle Salamander in the Circle

第二十七章
仮面の神

峯村 明

Salamander in the circle

第二十七章の登場人物

ヒューダー	……	学術調査団の団員	民族・言語学者
ヤスウ	……	学術調査団の団員	
イリチヤ	……	火精霊。ヒューダーが名付けた	
マミヤ	……	ホシナ族の娘	
バイスロイ	……	黄金門の皇帝の息子	
コモラ	……	前総督パンテオラの顧問	最高賢者
シパド	……	アンベレオのメッサナ先遣隊長	
レガリオ	……	アンベレオ王国の国王	
ソラン	……	〃	祭祀長

これまでの主な登場人物

ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー	世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長 マミヤの父
	ティコ	科学者		オマキ	ホシナの妻
	ナシル	本部・事務職員		キト・コマ	ホシナ族の男たち
	ダーヴェ	学術調査団の団長 上級賢者		ゴン	ホシナ族の男 (ヤサカオ族出身)
エウメロス王国	レル・ヴァリス	王室付近衛隊長		サノヒコ	王に仕える役人
	ヴァリス将軍	レルの父		フツヌシ	王に仕える者 将軍
	カール	王子 ヘルガの弟		ヤサカオ	ヤサカオ族の族長
	ロウナス	国務省の高官		チドリ	アマセオの妻
	アンテロ	レルの副官		ハマツ	チドリの養父
	讃政	亡国王の弟		タマシギ	ハマツの妻子
	ヘルガ	王女		オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者
ケストル王国	パウル	国王		コタエ	〃
	ウルリク	第三王子	スクナ	〃	
	ヘンリク	ウルリクの息子	アマノカガセオ	シトリ族を去った兄弟	
	ホベオクー	ケストル人の美女			
	ソルド	闘技場の警備隊長			
黄金門市	皇帝	皇帝	冥界	冥界王	冥界の王
	バソネル	バイスロイの参謀		ベネトナシュ	死神
メッサナ市	パンテオラ	メッサナ市の総督		テクトリ	最下層ミクトランの主
	メルノ	音楽家	プラトニオ	メッサナを追放された化学者	
	バルダリス	メッサナ総督家の一人 臨時総督代理			
	メンドルブ	メッサナ化学者団の代表			
	バラム&バランケ	双子のジャガー パンテオラの部下			

目次

仮面の神

416.

417.

418.

419.

420.

421.

422.

423.

424.

425.

426.

427.

428.

第二十七章のあとがき

back number

奥付

仮面の神

416.

「あの晩、三人がメッサナへ帰って来た晩。町中のジャガーがいっせいに遠吠えしておった」、とコモラは言う。

「異様な雰囲気だった。かんたんに起きないヤスウが文句を言いながら目を覚ましたくらいだから、相当異様だった。もしかしたら……あの晩、遠吠えの中心にいた者が危険視されたのかもしれない」

「——やっぱり！」

「なんじゃ、ヒューダー、なにがやっぱりなんじゃ？」

「バランケだ。バランケとバラムだ。やつら、というか、バランケはメッサナへ来て真っ先に総督邸へ走った。元のあるじに会いに行ったんだ。あとをバラムが追った。総督邸の変わりよう、パンテオラ様がないのにショックを受けて、バランケは——」

「バラムとバランケは代々総督家に仕えた、高貴な血筋の、それこそ由緒正しいジャガーの末裔だ。言ってみればメッサナ市のジャガーの王だ。アンベレオが危険視するのも当然か……」

メッサナ市の本家アンベレオにはジャガーを友とする文化はない。街中を人々の間を、悠々とジャガーが歩きまわっているのも世界広しと言えどメッサナ市だけ。メッサ

ナ市特有のものなのだ。アンベレオから来た者には人間とジャガーの心的繋がりとは異様なものでしかないだろうと、容易に想像がつく。

「とはいえ……」コモラは額の汗を手の甲で拭い、「一頭残らず収容して管理とは……乱暴に過ぎる!」、とこっそりつぶやく。

総督代理パルダリスに匿ってもらっている立場の彼らは、ちょっとしたつぶやきにも気を使った。パルダリスはひじょうに不安定な心情を抱える市民を統治し、かつ、アンベレオとも交渉しなければならない。うっかりした思いの吐露がパルダリスを批判することにもなりかねなかった。

姿を消したバランケ、自ら檻に入ったバラム。

光り輝く総督府のメインバルコニー、女神のごときパンテオラと、その両側に侍った二頭のジャガーの姿は一幅の絵だった。

今ではそれらは禁忌なのか？ ついこのあいだのことなのに？

コモラは手のひらで胸を押さえた。心が侵蝕されていくようだと思った。

417.

メッサナの日差しは強い。目の粗い薄布を頭からかぶり口元を覆い、額で幅の狭い紐の

ような織布で止めて、紐の残りも薄布も肩から背中へ流すのが男も女もごく一般的な外出時の服装である。

その男がかぶっているのはそういった日よけの布ではなく、ターバンだった。着衣と同じ生地、黒地に銀糸を織り込んだ、なかなか豪華なものである。結び方を知ってか知らずか、布の端はしまい込まずに無造作に後頭部にはねあげている。豪華だがかなりくたびれている。公務の途中であちこち命がけの冒険をしたものだから傷んでしまったのだが、若者が背伸びをして豪華な古着を着ている、ように見えなくもない。

生まれながらの権力と滲み出る自意識とが体に染みついでいて、傲慢さとなって現れていた。彼はどう見ても異邦人だった。ことに今のメッサナの街中においては。

無残に焼け焦げた石の塊。ボムソワール一族が暮らしていた屋敷の跡を前に、彼は佇む。

(なんだ——これは——)

醜く歪んだ黒い塊。火をつけられたのだ、というが、それだけで硬質な石がこれほどまでに変質するものだろうか。異様な執念を感じる。異様な悪意。異様な嫉妬。異様な、嘲り。

(なんだ——これは——)

ほんとうに、市民の仕業なのか。人間の所業なのか。人間とはこれほど、醜いものなのか。

衝撃のあまり、身動き一つできない。彼がこの町で燃えるような青春時代をすごしたのは、ほんの数年前のことなのだ——

吹き抜ける一瞬の涼風に、ふと我に返る。涼風を心地よく感じている自分に気がつく。

ただひとつ、救いがあった。ただひとり、生き残りがいる。

この屋敷で生まれ育った娘が生きて存在する。ヒューダーがそう教えてくれた。

ボムソワール-メルノは生きている。彼女はメッサナを出奔し、名を変え姿をも変え、はるかな異郷の地で生きている。再会したところで彼女だとは気がつくまい、とヒューダーは言った。彼女は生きるために、名を変え姿をも変えたのだと。

そんなことを、信じよというのか。

おまえが信じようと、信じまいと、事実だとヒューダーは言った。「彼女は亡命者として受け入れられ、匿われている」

住民によって火をかけられ、黒焦げとなった屋敷跡を目の前に、彼は思った。逃げのび、受け入れられ、匿われているなら、それで十分だ。

物思いにふけていた彼は周囲に人が集まってきているのに気づかなかった。ふと振り返ってみれば十数人の人垣ができていた。そこにいるのはメッサナの住人だとすぐにわかった。メッサナ暮らしが長かった彼はメッサナ人と他国人の区別は容易についた。ひとことで言って、メッサナ人はみな美しい外見をしているのである。

たしかに彼らはメッサナ人に違いなかった。だが……

(彼らは何をしているのだ。ただ黙ってそこにいる。じっと私を見ている。何だ?)

バイスロイは目を細めた。ぞわっと鳥肌がたったのはなぜか。反射的に衣の下で黒曜石の短剣を握り締める。「あなたに加護がありますように」と、改めてマミヤから授かった短剣。

と、その時、人垣が割れた。人垣の間から現れたのは……若い女だった。アンベレオ軍の将校の制服を着ている。

金色の肌と金色の髪はアンベレオ人もメッサナ人もいっしょだが、この女の瞳は水のように薄い色だった。細い眉。薄い唇。制服は暗い朱色。

(血の色に染まった服を着た酷薄な……蛇……) バイスロイが抱いた女の印象がそれだった。

女はわずかな目の動きで、バイスロイについてくるように促した。バイスロイが体の向きを変え、一步踏み出すと人垣はいっせいに後ずさった。彼らは異様な光の目でバイスロイを見ていた。

419.

「あたしはシパド。アンベレオ国王陛下の先遣隊を率いる者」

女はそう自己紹介をした。一応、美しい部類に入るかもしれないが、金属が軋るような耳障りな響きの声だった。

バイスロイは応じた。「誰も、名など尋ねてはおらぬ」

「異国の者よ。不用意にあのような場所に立ち入ると、原住民の反感を買う。先ほども八つ裂きにされるどころだったのだ。感謝してもらいたいところだ」

バイスロイは我が身の傲慢さを自覚していたが、その彼が不快に感じる高圧さ。冥界から生還して早々、こんな女に出くわすとは。しかし女……シパドのいうことに興味も湧いた。

「『あのような場所』、とは？ 見物していると住民に八つ裂きにされるとはどういうことか？」

「そなたのような身分のありそうな異国人が知らなくてもよいことだ。忠告だけきけばよいのだ」

「美と智の殿堂メッサナにあのような場所があるとは知らなんだ。興味を持つなという方が無理だ」

まぶしい金髪が斜めにかかる女の額に、めらっと透明な炎がたったようだった。

「メッサナという土地はもはや存在せぬ。知らぬのか！」

色のない水のような目がバイスロイを見据え、いらだたしげに吐き捨てるように言う。感情の抑制がきかないタイプらしい、とバイスロイは観察した。

「それは、知らなかった」と素直に応じる。「なにぶん、よそ者の、世間知らずゆえ。つい観光に夢中になっていた」

シパドは、ふん、と鼻であしらった。「いい気なものだ。この時勢に観光とは。知らねば教えてやろう。メッサナという土地はもはや存在せぬ。ここはベレオーサという土地だ。古来からそういう名だった。由緒正しい王家の持ち物だった。それを、メッサナ家の連中が勝手に町を造って好き放題していた。ようやく本来の持ち主の手に返ったということだ」

バイスロイはふむふむと真顔で相槌をうつ。どうやらそれがアンベレオ王家の公式見解らしい。何割かはその通りなのだろう。

「ついでに教えてやるが、先刻の火事現場は王家に対する反逆を企てた者らのアジトだった。良識ある原住民が王家への忠誠を示すため、反逆者に掣肘を加えたのだ。だから物珍し気に眺めていると原住民の感情を逆なですると、あたしは言ったのだ」

「それはまた……」バイスロイは適当な言葉が思いつかず、あいまいに濁した。

「このくらい教えてやれば十分だろう。もう行け。そしておとなしくしている」

「ああ……それが……遊び惚けていたらカネを使い果たしてしまって……実は、行くあてがない」

「——そなた、外国人で、旅行者だろう？ 当局に申請してないのか！？」

「……なにを申請するのだ？」

420.

外国人や旅行者は当局にそう言えば、当面はなんの不自由なく暮らせるというのに、この放蕩息子はそれを知らなかったというのだ。シパドは、信じられない、という目でバイスロイを見た。そんな感情でもないよりましだな、とバイスロイは思う。少しは親しみがわくというものだ。

「……まあ、いい。ついてこい。話をつけてやる。ところでそなた、名は？」

「バイスロイ」

シパドの目は“信じられない”から不快なまなざしに変わった。

「あたしを馬鹿にしているのか。それは黄金門の後継者の名だぞ」

「いや、あだ名だ。知り合いは私のことをそう呼ぶ。偉そうだというので。まあ、本名は勘弁してくれ。本国の親に迷惑をかけたくないのだ」

シパドはあきれた、という仕草をして、ついてくるよう顎を振った。

421.

「バランケがいなくなったと思ったら、今度はバイスロイか……！」

ヒューダーはいまいましそうにつぶやいた。バイスロイはふらっと出かけて行ってそれきり帰ってこない。

「メッサナに長いこと住んでたんだろ？ 勝手はわかってるんだろうから、べつに心配すること、ねえんじゃねえの？」

「だから心配してるんだ！」ヒューダーはいらいらとヤスウに噛みついた。「どこかで道に迷ってるんならまだいい。やつのことだから、あぶないところへ頭を突っ込んでしまったか、それとも、……つかまってしまったか」

「で、でもよ、めっぼう身分は高いんだ、そう簡単に危ない状況にはならないんじゃ」

「その身分の高さを利用されたらどうする？」

ヤスウは、う、と呻き、ヒューダーも自分の言葉に黙ってしまった。気まずい沈黙。

*

「ねえ、ヒューダー」

「ん？」

「バイスロイさまがヘルガさまの婚約者だって、知ってた？」、とマミヤ。

「ああ。そう聞いている」

「ほんとだったんだ……」

「だったらどうしたんだよ」ヤスウはその“ヘルガさま”とじっさいに顔を合わせたこと

がない。

「うん……バイスロイさまとレル・ヴァリスと、ヘルガさまはどっちだったら幸せかなあって」

ヤスウもヒューダーも、こんどは、え、と呻き、ヤスウは、「おれはヘルガさまの名前しか知らねえからな、ぴんどこねえな」とさっさと逃げてしまう。マミヤの目はヒューダーに向かう。ヒューダーは敵地に取り残された気分になった。

「さ、さあな。おまえは、どう思うんだ？」

「あたし？ う〜ん……どっちも捨てがたいのよね……頼りがいだったらぜったいバイスロイさまだけちょっとクールすぎるかな、そこいくと、レル・ヴァリスはちょっと腰が引けてるけどヘルガさまにぞっこんなのよお」

「——そうなのか」

「自分から愛するか、相手から愛されるか、問題はそこよ」

マミヤは両手の指を組み合わせ、うっとり天井をみあげた。ヤスウはそろそろと立ち上がり、部屋の扉が開いているのを目で確かめた。

「いやあのな、おめえが悩むことねえだろ、それともなにか？ ひょっとしてゴンとヒューダーをてんびんにかけてるのか？」

にやけて言いながら、ヤスウは脱兎のごとく部屋を逃げ出した。

422.

思いがけず、アンベレオ国王の先遣隊本部に潜り込んでしまった。ここは能天気な放蕩息子を演じておいて損はなかろうと判断する。小うるさいヒューダーはちっとも帰ら

ないことに気をもむかもしれないが、それよりこっちの方がなんぼか有益だろうと、商売人のような判断をしたバイスロイであった。

「氏名……バイスロイ。外国人。本国名、本名、訳あって不記載とする、と」

ケストル人も驚くいい加減さ。

(ああ。そうか) と、バイスロイは納得する。正確である必要など、ないのだった。なぜなら……

「ところでそなた、職業は？」

シパドに聞かれ、バイスロイは迷わず答えた。

「芸術家だ」、と。

ふん、とシパドは鼻で笑った。「都合のいい言葉だな芸術家？ 得意は何か」

「……彫刻、かな」

「彫刻……なにを彫るのだ」

「なんでも。石。宝石。金属。貴金属」

べつに嘘でもはったりでもない。彼はメッサナ留学中にそういった修業も積んでいる。

女将校シパドはそれを聞いてふと目をあげてバイスロイを見た。彼と目が合うと、つと逸らしてしまっただが、なにごとか思案しているようだ。やがて――

「ということは――バイスロイとやら。金貨はどうだ？」

*

国王の行幸を記念して、新しい金貨を発行するのだという。試作品を作っているところだが、はしから失敗しているのだとシパドは言った。

「失敗、とは？」とバイスロイ。

「意匠は国王陛下の横顔である。ところが、何度やっても図案が陛下に似ていないのだ。いくらなんでもこれはまずい」

そう言ってからシパドは吐き捨てた。「メッサナの工芸家の腕はたしかだと聞いていたのだがな！」

「どんなに腕のいい工芸家でも、モデルを直に目にしないことには。彼らにその機会があったのだろうか」

「陛下のご尊顔を！？ 職人風情にそんなことが許されるものか！！」

「では、モデルに似ていない金貨ができるのは仕方あるまい。私にも、いや、誰にも、できないさ」

*

こうしてバイスロイはありがたくもアンベレオ国王レガリオに拝謁の運びとなった。

彼は王国の中の王、黄金門市の次期皇帝という高位の身であったが、いまだ雌伏中であったため、どこの王国でも知られているのは名前だけだったし、かの巨人族襲撃で黄金門の王族は全員行方不明となっている。よもやそのご本人が旧メッサナ市をうろろろしていようとは誰も考えなかったのだ。

国王レガリオはバイスロイと名乗るこの自称芸術家を疑うどころか興味を持ち、城に招き入れた。

もっとも、そのことは旧メッサナ閉鎖がアンベレオによるものであると物語っていた。

423.

国王レガリオ七世は、アンベレオの正当な王家の正当な王である。父はもちろん前の国王、母は同じ一族の出身、妻は現在選考中で、まだ独身。どこからどこまで由緒正しい人物で、王位を正当に継いだ。教育と福祉に熱心で、国内は治安も良かった。強大な軍を持っていたからである。

軍を司るのは前の王の弟にしてレガリオの叔父、ウィクトル将軍。祭祀は母方の叔母ソランが司る。叔父、叔母といっても、レガリオと十歳位しか変わらない。つまり皆若い。

王国の繁栄の基盤は交易だった。王、将軍、祭祀長を現役から退いた年寄りたちが次に行き着くところが経済界だった。そこでは現役だったころよりさらに丁重に扱われ、彼らの人生は死を迎えるまで安泰だった。若く経験の浅い王より力を持つ、老練を極めた組織でもあり、多くの重要な決定はそこで為された。レガリオやウィクトル、ソランは単に看板だったのである。表向きは若々しいが実は老人の集団が牛耳っている。アンベレオ王室は幾代にも渡ってそうやって栄えてきたのだった。

*

アンベレオ王国は金星神を信奉している。みなそう信じている。

が、いつのころからか、別の神的存在が金星にとって替わったことを知る者はあまりいない。

王国を実質動かしている老人たちは交易に重きを置き、経済の発展が国家の発展であると考えていた。国家を繁栄させてくれるものこそ“神”だった。彼ら自身が新たな“神”

を招いたのである。

旧メッサナ市を奪い取り、黄金郷を手に入れる計画はほぼ成功している。レガリオ王のメッサナ行が宣告されているのだから、もう間違いない。その知らせがもたらされた王都は空前の祝賀ムードに沸き返っていた。ここではアトランティス大陸を席捲した巨人族も、対処しようとして大陸中を汚染した原子爆弾も、噂さえ聞かれなかった。

人々は繁栄をもたらしてくれる“神”にもろ手をあげて感謝し、褒めたたえた。

そして……

陰から王国を支配する者たちへ、ひそかに、“神”のメッセージが届けられた。

アンベレオ首脳部にメッサナ奪還を吹き込み、主導し、成功に導いた“神”は、その代償を要求してきたのである。

心臓。

動物のではない。

人間の。

生贄を捧げよ、と。

看板にすぎないレガリオもソランも、このことを知らないではすまされなかった。

“神”は仮面を脱いだ。

前途洋々の祝賀ムードの中、彼らを導いてきた“神”は、おそろべき本性を現した。

424.

レガリオは友達のような気さくな態度で旧メッサナから来た芸術家に接し、金貨に彫りこまれるべきモデルに引き合わせようと廊下を歩いた。

恐れながら、とバイスロイはおそるおそる尋ねる。「モデルは陛下であられると聞いておりましたが……」

「うむ。わたしもその気でいたのだ。はっはっは。お告げにより変更になった」

(お告げ?)

先遣隊長より国王の方が愛想がいいとはどういう国だと不思議に思いつつ、なお不思議なのは……金貨の発行とは原材料の金の調達からして一大事業だ。国王とはいえ、一存で決められるわけではない。現実的な諮問を経なければならないはずだ。それがお告げによって覆されるのか?

違和感を覚えながらレガリオが開けた扉に続く。入ったところは控えの間であるらしく、無人。もう一つの扉を開けて中にはいると……広い部屋。椅子、卓、飾り棚、どれも贅を尽くした趣の家具類。卓上に馥郁とした盛花。象牙色の細い糸で編まれたレースが天井から何重にも下がり、棕櫚の葉と共に微風にそよいでいる。

アンベレオは南国に位置するため、城も明るく、開放的なつくりになっているが、この部屋は……バイスロイの目にはどことなく陰鬱に見えた。

椅子の一つに人影。若い、男。

バイスロイともあろう者が、その人物を目にして体が固まった。

レガリオはその様子を目の端でとらえ、思わず微笑した。芸術家の示した反応はレガリオが初めてその人物と会った時のそれと、まったく同じだったから。

425.

血統書付きのレガリオだったが、その少年の前で心ならずも跪きそうになった。実際にそんなことをしたら王たる者の威厳に関わることだったが、気分的にはそうしそうになった。生まれた時から次の王として扱われてきた彼としては、生まれて初めての経験だった。まだ十代だろう黒衣の少年は、なにか言い知れぬ深淵を持っていた。白髪に紅色の目。前髪をあげてオールバックにし、あらわにした額に細い銀の略冠。中心に目と同じ紅色の宝石が第三の目のように、やはり昏い光を湛えている。

「イリチャ殿、と仰せられるか」

レガリオはその名に遠い衝撃のようなものを覚えた。そして相手が不愉快に感じるほど、まじまじとその目をのぞき込んでしまった。相手は軽く眉をひそめたので、レガリオは少々あわてて、軽く手をあげた。

「いや、その、良い名であられる。じつに良い名であられる。貴殿はその名の意味をご存じであろうな」

「……『槍』、という意味だと聞いている」

「いかにも。『槍』。そう」、王は自分で言って自分でうなずき、「その、実の意味は……」問いかけるように相手を見る。

「？」

王はいったん目をつむって、開き、言った。

「それは、光輝く矢、真っすぐに飛ぶ眩い光線、というのが本当の意味なのです。槍には違いありません。しかし、その名をつけられた方の深い思いを感じずにはられません。それにしても良い名だ！」

一国の王に褒められ感激されるほどのことを、あのヒューダーが考えていたとは思えないイリチャだったが、わるい気はしなかった。思いがけない話でもあり、目が少し濡れた。戸惑いの表情を浮かべているイリチャは年相応に見え、王は最初に彼と相まみえた時の印象が揺らぐのを感じた。王は心底、不思議に、思った。光り輝く名を持つ者が、暗黒神の代理人、とは。

426.

レガリオはものごとを疑うということをしないうちのよい人間だったが、この少年はたして、本当に“神”の代理人なのかと疑いを抱く者はいた。たとえば先代祭祀長である。

先代祭祀長は現役祭祀長に先立って少年の「お顔を拝見」することを主張した。若い

者に任せておけぬということらしい。

だいたい、代理人が送られてくるなど、前代未聞のことだったから無理もなかった。

王国の政策は神託によって決められていることになっていたが、それをもたらすのが何者か、確かめるすべはなかった。かつてアンベレオ人が持っていた神的存在との交流能力は今ではすっかり衰えてしまい、祭祀を司る者も例外ではなかった。

先代は頭から代理人なるものを疑っていて、別室からこっそりと覗き見することにした。まず、先代がびろうど張りのスツールの上でつま先立ちして高窓から隣室を覗き、次に現役が覗くことになった。不敬きわまりない行為だが、現役よりはるかに権力を持つ立場の者の主張にはだれも逆らえなかった。

そして筋力の衰えた脚でつま先立ちしたせいで先代の脚は引き攣り、スツールから転がり落ちた。分厚いカーペットが音を吸収してくれたが腰をしたたか床に打ち付け、大急ぎで担架が駆けつけた。関係者の間では「バチが当たったのだ」という噂がささやかれた。

現役のソランは先代に代わりスツールによじ登るという大役を果たし、代理人の様子をその目に焼き付けた。

427.

ソラン祭司长はレガリオの訪問を恭しい態度で受けた。

彼女は黙ってレガリオをさらに奥まった部屋へ招き入れる。祭祀を司る最高の長と国王だけが知っている秘密の部屋。窓はひとつもなく、四面の壁と天井はすべて黒いびろ

うどで覆われ、あるいは仕切られ、灯かりは装飾のほとんどない純金製の燭台のろうそくだけだ。その燭台をこれまた飾り気のない小さな卓に置き、ソランは仕切りの一枚を、左下端から右上へと、慎重な動作で両手で持ち上げた。

そこに現れたのは、一枚の肖像画。

一人掛けの豪華なソファの白髪の子と其の脇に立つ黒髪の子。小さなろうそくの光の中でも、鮮やかな色と、緻密に、細部に至って描きこまれているのがわかる。実在のモデルを描いたものに違いない。

「この肖像のモデルが誰なのか、なぜここにあるのか、いつの時代から王家の秘められた宝とされているのか、わたくしを含め、知る者はおりません。けれども、陛下」

ソランの喉がごくりと鳴るのがレガリオの耳に聴こえた。

「今日、わかりました——」

レガリオはこの部屋に入るのは初めてではないが、肖像画の存在は初めて知った。王家のごく一部の者、それも祭祀の関係者しか知らないものだったのだ。彼は祭司長の言おうとしていることを悟った。

暗黒神の代理人としてやって来たあの少年は、肖像画の二名のモデルの特徴をもののみごとに備えていた。髪の色、瞳の色、ことに顔の作りと体形と醸し出す雰囲気は、立っている黒髪の子にそっくりだった。少年はこの二名の血を継ぐ者だ。つまり——レガリオは自分の喉がごくりと鳴るのを聴いた。「それはつまり——」「御意」

ふたりは申し合わせたように互いの視線を求めた。そして互いの目の中にさまざまな色がゆらめくのを見た。

「叔母上は、イリチャ、という言葉をご存じでしょうか」

唐突な話題にソランは少しばかり面喰った。そして唇の両端を持ち上げて笑みをうかべた。

「おお、イリチャ！ 神の光、神の恩恵、一直線に闇をつらぬく光り輝く矢！ 古いけれども美しい言葉ですわ！ 陛下がそのような言葉をご存じとは。して、その言葉が、なにか？」

「あの少年の名前なのです」

ソランは笑みを固定した表情のまま頭を傾けた。彼女もやはり感じるものがあるのだとレガリオは思った。暗黒神の代理人の名が『光り輝く矢』とは。ソランは笑みを消して頭をふった。

「陛下」、ソランは重い口調で言った。「あの少年が代理人であることに間違いはございません。実は——」

「……なにか？」

「証拠がございます。あの少年は驚くべきものを身に着けています」

ソランは肖像画の一点を指さした。ソファに掛けた男の肩に女の手がかかっている。その指に金色とも緑色ともつかない光が輝いている。

「オリカルクムの指輪——」

*

そしてこの日、ソランは神託を授かる。

旧メッサナを奪還した記念の金貨に刻まれる肖像は、この代理人のプロフィールである、と。

信奉する神のお告げとあらば絶対である。アンベレオ王国はめでたく領地を取り戻した記念硬貨のデザインを急遽、変更することになった。バイスロイのアンベレオ入りはまさにそんな時であった。

428.

驚いたことに、レガリオは少年に対して膝を折って敬意を示した。それは最高位の礼だった。国王が、一少年に対して。

さらにレガリオが、「この者、芸術家がお姿を写させていただきます。その間、楽団がお退屈しのぎを」、そう低く耳打ちするのがバイスロイには漏れ聞こえた。

楽団の登場は気まずさから救ってくれたが、会話もできなくなった。監視の役目もあるのだろう。しかし——（世間話くらいできるはずだ）

領土奪還記念硬貨のモデルを国王から変更されたというが、この少年はいったいどういう立場なのか。レガリオの態度からして国王より上らしいが、そんなことを話題にはできない。

「どうぞお楽に」、とバイスロイは言った。「お目は棕櫚を揺らすそよ風に、お耳は流れる楽の音に、お任せください。さすれば、あなたさま本来のお顔が現れい出ますゆえ」

バイスロイは芸術家になり切って大げさな身振りを交えた。舞台の上にいる感覚がよみがえってくる。ヒューダーが見ていたらたぶん大笑いしていただろう。ヒューダーだけではない。イリチャもだ。かつての彼は気ままに泣いたり笑ったりするごくふつうの少年だった。いや……ヒューダーといっしょだったからだろうか。

少年はバイスロイの態度にむっとすることも、笑うこともなく、ただ言われた通りにした。この開放的な部屋にバイスロイが感じた陰鬱な雰囲気は少年の心情だったのかもしれない。

バイスロイは細い木炭を指で立ててモデルの頭部のバランスを測りながら言った。教えてやろう、と思った。

「アンベレオはよい所です。気候、風土、人々、みな眩しいほど活気があります。これほど素晴らしい所だったとは、今、己の寡聞を恥じているところでございます。旧メッサナに残してきた友人らに再会したならば、語って聞かせてやらなければ」

果たして少年を刺激したのはどの部分か。彼のなめらかな頬を涙が一筋伝わるのをバイスロイは見た。

第二十七章 『仮面の神』

第二十八章へ続く

第二十七章のあとがき

11月13日の朝。やってしまいました。

ミネムラは『Story Editor』というソフトを愛用してまして、この中にあんなものやこんなものがどっさりと入っています。まあ、使いやすいのです。最近同じ名称の似た機能のソフトもあるようですがミネムラが使ってるのは古いやつです。長く使ってるのでよもや操作ミスなどあろうはずがない！ はずなんですけど…

いったんパソコンを閉じ、しばらくして手直ししようと呼び出してみたところ…出てこない。??? 最近作った【七月号】やその他資料はちゃんと出てくるのに、なぜか Salamander inだけがでてこない！ なんでやねん…

まあ、自分でなんかやったんだろうけどですね、ファイルは残ってて中身はゼロ表示、からっぽ、それも前回作業終わらせたとおぼしき時刻で。ファイルだけ在って中身がないなんて。わからない！

いろいろ書きこんであったのだ…人名やストーリーの試行錯誤とか、サブタイトルの案とか。

呆然。呆然。

これはもしかしてSalamander inから手を引くべしという冥○王さまからのメッセージ！？ これ以上書いてはならぬと！？

いやー。そうはいきませんよー。冥○王さまー。ここまで来てそれはない。

呆然としてても始まらないのでデータ作り直しに着手。幸い、肝心な部分はPubooさんに登録してるからそれはいいんだけど、それにしても第二十七章の途中で余計な作業ができてしまったもんです。やっぱり冥○王さまかな。なにかお供えした方がいいかな。

back number

第一部

『第一章 世界の果ての島』

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。

ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章 破滅の襲来』

調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章 変態』

エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチャ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。

※・サブタイトルについて。

オタマジヤクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章 レムリアン・ラブソディ』

ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章 メッサナ』

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章 脱走巨人』

ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半、レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章 メッサナからの逃亡』

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章 IRITIYA』

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだった。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。

一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章 原子の火』

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナを抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く -原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章 二極世界』

死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章 天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。

そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章 機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激的な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。

一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章 アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。

報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。

この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。

アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章 ヤサカオ 立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。

死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようとするが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンがヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章 ふたつの北極星』

かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス-死神と対決する決意を固める。

一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。

オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。

はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章 トゥランの七つの洞窟』

冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買い、ついに見放される。

一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起こり、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

『第十七章 ブルー・マーキュリー遭難』

巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門市の皇帝は、評議会には専門家がないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。

『第十八章 王女の冒険』

ケストル王国に向かったスクナとヘルガは、途中、アマセオと出会う。彼はホシナ族と行動を共にしてきたが、ホシナ族が安全な場所で逗留中、単独行動をしていたのだった。スクナらが大任を負っているのを知り、アマセオはケストル北方へと偵察にむかう。

ケストル王パウルと対峙し、国民らに避難を呼びかけたヘルガはバイスロイが王都にいないことを知る。彼は離宮へ招待されていたのだった。ヘルガにはおぞましい記憶の残る場所だったが、バイスロイ救出に急行する。しかし王都よりずっと北にある離宮は決壊した氷河に吞まれようとしていた。

『第十九章 ミクトランへの道』

ケストル闘技場からエウメロス地下シェルターへ移されたアマセオ。レル・ヴァリスは彼自身が保管していた闘技場の見取り図とアマセオが持ってきた情報が一致していること、そしてかつてダーヴェのメガネを解析したコタエの記憶から、ケストル闘技場には巨人族が出入りしていた機構があることに気づく。一方、破壊されつつある闘技場地下にある渦に飛び込んだバイスロイらはどこにも知れぬ場所に到達。バイスロイは到達地の特徴から、それが太古に失われた転送システムであると知る。

第五部

『第二十章 冥界の巨人』

バイスロイ一行を出迎えたのは、ネウトラ評議会のダーヴェ。ダーヴェはケストル闘技場から転送システムを使ってミクトランへ来たのだった。同じ方法で多くのケストル人がミクトランにやって来ていた。いくつもの事情で母国へ帰れなくなったケストル人は、ダーヴェらをつけ狙った。彼らは、転送システムのパスの機能をもつ『評議会の身分証』をもたらしした人間、ヒューダーをも恨んでいたのである。地上帰還の可能性がきわめて低いなか、ダーヴェたちは最大の謎、巨人族がどこからやってくるのかを解こうとしていた。

『第二十一章 メッサナの黄金郷』

ヒューダーとスクナとはホシナの郷について、イリチャについて情報を交換し合う。スクナはその見た目からメッサナからの逃亡者メルノはイリチャの身内ではないかと考えていた。しかしヒューダーは納得できない。メッサナ人とイリチャとでは外見の特徴が違い過ぎるからだ。

かつてメルノは、その名の者は死んだとし、偽名として自らミツハと名乗った。そのことを知ったヒューダーは、『ミツハ』とは水の精霊を表す音であると気がつく。古い伝説によればイリチャの母親は水の精霊である。

一方、メッサナ滞在中のヤスウとマミヤは総督代理パルダリスのもとに身を寄せていた。そこへメッサナの王家アンベレオの王、行幸の通達が届く。それは国王の行幸完了まで現在メッサナ市にいる者はその場を動いてはならないという命令でもあった。

『第二十二章 物質化した太陽光線』

黄金の力とは世界を清浄し、活性化させるもの。その働きは太陽と同質である。誰もが受け取ることのできる太陽光線と同様に、人は誰も黄金を受け取り、その浄化と活性化エネルギーによってより偉大な存在へと上昇する……

しかし黄金時代を象徴するメッサナ市は、音楽生迫害事件をきっかけに内側から崩れ、メッサナ市の

本家アンベレオ王国の植民地では黄金が高騰を始めた。
いまだ対処の手がかりもつかめない巨人族問題と相まって、世界は混迷を深める。

『第二十三章 ミクトラン脱出』

ケストル人ソルドらがミクトランを去った。時と場所を選ばなければ脱出は可能なのだが、ただ、計り知れない危険を意味していた。そのために、スクナの脱出計画をダーヴェは強硬に反対する。しかしヒューダーは絶対に安全な道などないと言い、反対するダーヴェを牽制する。そしてスクナともう一名の枠に、バイスロイはヘルガを推す。彼はメッサナの音楽生迫害事件の被害者たちはかつて親交を結んだ者たちだと知り、物理的にメッサナに最も近い場所であるミクトランに残ることを選んだのだった。

ミクトランの怪物の群れが大挙して押し寄せるなかを、スクナとヘルガは脱出を決行する。

『第二十四章 トーラの鷲の園』

ヘルガはアマノカガセオによって大陸中南部の森林地帯へといざなわれる。陸上からはとうていどり着けない険しい地形のなかに現れた湖に浮かぶ島・トーラで、ヘルガは去る大災害の直前にケストル宮廷から退避したはずの家臣たちと再会する。そこは掘削中の地下道がいずれ到達する地、出口でもあった。

一方、ミクトランに残った一行の巨人族探索は遅々として進まず、仮面の怪物の執拗な攻撃に手を焼いていた。怪物群の攻撃を一手に引き受けているイリチャに、戦いを宿命づけたかのような名づけをしたことにヒューダーは責任を感じていた。

『第二十五章 イリチャの行方』

ヘルガからの贈り物である指輪を追ったイリチャは死神ベネトナシュの手に落ちた。しかし、ミクトランの主・テクトリが横取りする。わけもわからず嘲弄されるイリチャだが、巨人族が造られる現場をついに目にする。そこはミクトランの中に作られた異次元空間で、製作者はメッサナを追放された化学者プラトニオ。評議会の爆弾が巨人族を殲滅すると同時に地上のあらゆるものを汚染したことがわかると、テクトリもプラトニオも慄く。評議会の爆弾とは、メッサナが封印していたきわめて危険なものだったのだ。そんな彼らの前に現れた男が巨人族製造を弾劾したことによって巨人族問題は集結しそうにみえたが、地上を汚染したのが地上の人間であると知ったイリチャは激しく落胆する。

第六部

『第二十六章 ジャガー狩り』

ミクトランで行われていた巨人族製造はある人物の一声で打ち切られた。ミクトランは冥界から切り離され、ダーヴェたち三名はイリチャの懇願により地上のメッサナへと送られた。巨人族の危機が無くなり、ミクトランを脱出できたことよりも、その急転直下の転換ぶりに三名は戸惑う。なによりイリチャが謎の人物に連れ去られてしまった。彼らは敗北感と無力感とに苛まれる。

メッサナの前の提督パンテオラを飼い主としていたジャガーのバラムとバラケもあるじを失った現実と直面し、失調し始める。そんな折、メッサナ中のジャガーがすべて集められ、くにが管理するという通達が発表された。

奥付

Salamander in the circle

第二十七章 仮面の神

2023年11月20日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#) blog [D & R](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
